

に 5% の農家が自給していた。“おやつ”についてもパン、牛乳、ラーメン等の市販品がかなり好まれており、従来の自家製おやつは減少の傾向にあった。以上の様に農家も生産者であると同時に消費者としての一面が増大して来た。その様な中で食品公害などに対する関心はかなり少く、約 31% の主婦は全く無関心であり、今後家族の健康管理の上からも消費者教育の普及が望まれる。

F—17 農家生活に関する 2・3 の考察(第 4 報)
—食品の自給度と消費者意識について—

京都女大家政 亀井 光子

1. 第 2 報で山村農家の食生活の実態を調査した結果、バランスの点に改善の必要が認められたが、栄養的にはかなり向上しつつあることが明らかとなった。一方食生活の向上に伴って飲食費中に占める買入食品への支出割合の増加傾向がみられた。本報では農家生活における食品の自給状態を探ぐり、食品公害の問題についての様な意識をもっているかを知る目的で調査を行った。

2. 調査対象は前報と同様大分県大野郡野津町の畑作中心地区農家 100 戸とし、昭和 45 年 5 月 1 日～31 日迄の期間質問紙法及び現地聞き取り法によって行った。

3. 買入食品数は特に昭和 35 年以降急激に増加しており、米、味噌、野菜、漬物、茶は殆んど農家で自給されていたが、その他の食品は殆んど買入されていた。野菜については少くとも 1 戸当り 1 種類以上買入しており、味噌は 80% が自給であるのに対して醤油はわずか